

早期介入・予防の発展に向けて

富山大学大学院医学薬学研究部神経精神医学講座
鈴木道雄

2017年度より本学会の理事長を拝命いたしました。本誌の巻頭言を執筆する機会をいただきましたので、この場をお借りしてご挨拶申し上げます。

本学会の歴史を簡単に振り返りますと、その始まりは、学会ホームページにも書かれているように、1996年に沖縄で開催された第16回日本社会精神医学会において、シンポジウム「社会精神医学における新しい戦略－精神分裂病の予防の可能性」が行われたのを機に、日本精神障害予防研究会が発足したことです。これは、国際早期精神病協会（IEPA、現在はIEPA Early Intervention in Mental Healthと改称）の第1回大会がメルボルンで開催されたのと同年のことであり、小椋力先生、岡崎祐士先生を筆頭に中心となった方々の先見性と熱意が表れています。2001年の第5回集会は、本邦初の予防精神医学領域の国際学会である第1回日本国際精神障害予防会議として、やはり沖縄で開催されました。2008年の第12回集会で日本精神保健・予防学会に名称が変更され、初代理事長に水野雅文教授が就任されました。その後は学会としてさらに発展を遂げ、2014年の第18回学術集会は、東京においてIEPAの第9回大会と連続開催され、大いに活況を呈したことは記憶に新しいところです。

本学会が歩みを進めてきた20年余りの間に、精神疾患の早期介入あるいは予防は大きな国際的潮流となりました。国際学会に参加するたびに実感するのは、今やIEPAのみならず、精神医学分野の諸学会において、精神疾患の早期介入はもっとも熱心に議論が交わされる領域のひとつとなっていることです。それとともに、早期介入研究が本格的に開始された当初は、早期精神病という概念にも示されるように、統合失調症に対する早期介入や予防を主眼としていたものが、今や診断横断的に精神疾患全般の早期段階に対象範囲を広げ、また医療の分野にとどまらず活動の裾野を広げ、若者の精神的健康を個別のアプローチによって支援する方向へ進んでいます。

わが国に目を向けてみますと、早期介入や予防に関心を持つ人が増え、重要性が広く認識され、優れた取り組みが熱心に行われているものの、先進諸外国に比較すると、まだ活動の幅は十分に広がっていないように思われます。この領域では、医療、保健、福祉、教育など、広い範囲の専門家による協働が必要です。児童精神科医と一般精神科医の円滑な連携も求められます。生物－心理－社会的な総合的アプローチによって研究を推進し、精神疾患のリスクファクターとレジリエンスについてさらに深

く理解していくことが目標となります。その際には、当然ながら、当事者や家族の主観視点を十分に汲み取っていくことも求められるでしょう。このような新しい領域が健全に発展するためには、臨床と研究が相互に刺激し合いながら、一体となって進んで行くことが重要と考えています。

これから早期介入や予防の重要性はさらに増し、本学会の果たすべき役割はますます大きくなると考えられます。皆様には、引き続きの活発な取り組みと情報発信をお願い申し上げる次第です。